
Fate/stay hollow

むり...です

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / s t a y h o l l o w

【Nコード】

N 1 5 2 3 B A

【作者名】

むり…です

【あらすじ】

F a t e / s t a y n i g h t の再構成。サーヴァントはこの世全ての悪^{ユズリシノア}。内容は繰り返される聖杯戦争。死んだらまた、やり直し。聖杯の期限が過ぎたらやり直し。この聖杯戦争を終わらせるために衛宮士郎はなんか頑張っていく物語。キャラの性格がもしかしたら違つてるところがあるかもしれない。

この小説は作者のオリ（妄想）設定によって動いています。オリ設

定が嫌な人はこの小説を読まないでください。あと作者の自己満足
小説です。批判や誹謗中傷はやめてください。

諸注意 オリ設定（オリキャラは出ません）（前書き）

Fateの自己満足小説です。この小説は作者のオリ（妄想）設定によって動いています。

オリ設定が嫌な人はこの小説を読まないでください。作者の自己満足小説です。

批判や誹謗中傷はやめてください。

諸注意 オリ設定（オリキャラは出ません）

Fateの二次創作は初めてです。型月の小説は難しいときいた。なのでボチボチがんばります。

この小説は作者のオリ（妄想）設定によって動いています。

オリ設定が嫌な人はこの小説を読まないでください。作者の自己満足小説です。

批判や誹謗中傷はやめてください。

マスター 衛宮士郎

サーヴァント アヴェンジャー

真命：この世全ての悪 アンリ マユ

宝具：繰り返し『殺されるか、聖杯の期限が切れるかすると一日目に戻る』

：偽り写し示す万象 ヴェルグ・アウエスター

ザリチエ

タルウイ

：右歯噛咬と左歯噛咬

アンリミット・レイクステット

：無限の残骸これは公式の者とはちがくする

全身の紋様は『この世全ての悪』を現す呪い。それは時代・時間によって変動していくものなので、シンボルたる『アンリマユ』以外の模様は変化する。

アヴェンジャーは最弱なので他のサーヴァントに感知されることはほぼない。

繰り返しについて。結果は残らないが原因は残る。ただし、アヴェンジャーか衛宮士郎の知らない原因は残らない

衛宮士郎との関係。

普通のマスターとサーヴァントの契約と少し違う。アヴェンジャーは衛宮士郎と契約しているが衛宮士郎にとり憑いているかたちにもなっている。

聖杯戦争が始まる前からアヴェンジャー（アンリマユ）はもともとから衛宮士郎にとり憑いていたが、だがアヴェンジャーは虚無であるから、まったく衛宮士郎には影響がなかった。

そして、聖杯戦争が始まって、偶々土蔵でアヴェンジャーを召還した。媒介はアンリマユ本人なのでアヴェンジャーが召喚された。アヴェンジャーには姿がないのでマスターである衛宮士郎の姿をかりた。

他のマスター、サーヴァントは原作と同じ。

追記する可能性ある。

プロローグ

カキンキイインカキンキイインカキンキイ

俺はグラウンドにいた。

音が聞こえてくる。鉄と鉄が重なり合う音だ。
そこで、観察する俺。

赤い男と青い男が人間とは思えないスピードで鉄と鉄みたいなものを打ち込む。

キイインカキンキイインカキンキイインカキン
キイインカキンキイインカキンキイインカキン

その戦いは目では追えないくらいの早さで行われている。

鉄と鉄が弾ける音

キイインカキンキイインカキンキイインカキン
キイインカキンキイインカキンキイインカキン

あれは人間ではない。人間はあれほどのスピードで動けるわけがない。

ザッ

その時、青い男の腕の動きが止まった。止まったので手に持っていたものが見えた。紅い槍。

青い男と赤い男が動きを止め。なにやらお互い睨み合っている。

俺には青い男はその紅い槍になにか危険なものを溜め込んでいるようにみえた。

驚き、身動きがとれない感覚が俺を襲う。そのとき、俺は無意識に

「…っ」

「悪いがここで死んでくれや…！」

グサッ

ズドッ

ドサッ

俺の胸にあの紅い槍が刺った。

そして、俺の意識は落ちていく。

……。

目が覚めた。覚めるはずがないと思っていたのだが。誰か助けに来てたのだろうか？

「宝石？」

床に高そうな宝石が落ちていた。

いつまでもここにいても意味がないので帰ることにした。

○

家に着き。畳みにねっころがる。

「……っ！」

今は亡き、切嗣^{じいさん}が仕掛けた結界が反応した。

「まさか…あいつが！」

何か武器となる物を！

ポスターが一個。つつ、仕方ない。

「同調、開始トレースオン」

「構成材質、解明」

「構成材質、補強」

「トレース全工程、オフ完了」

バギッ

上から！

「一日に同じ人間を二度殺すことになるとはな」

紅い槍が俺を目掛けて飛んできたが持っていたポスターでそらす。

「……っ」

紅い槍が俺の頬をかする。

「ほお、変わった芸風だな坊主！」

ヒュンッ！

槍を打ち込まれ、それをなんとか強化したポスターで軌道をそらす。

廊下に行き、窓の近くによる

ヒュンっ！

青い男が俺を目掛けて槍でつく。つかれた槍を回避しよう後ろによける。

パリンッ！！

後ろは窓ガラスがあったので、窓ガラスを割って外に出ることになった。

「オラッ！」

「……があっ」

青い男に蹴り飛ばされる。俺の背後には土蔵。

「詰めだ坊主。もしかしたらお前が七人目だったのかもな」

「…っ
」

「じゃあな坊主。今度は迷うなよ」

死ぬ

ここで終わってしまうのか！。

グサッ

俺の胸にあの槍が刺り、刺さると同時に俺の意識は途絶えた。

根源

2月1日

「お前は？」

「あ？お前が呼び出したんだろ」

「サーヴァント。アヴェンジャーだ。あんたが俺のマスターか？」

「マスター？」

「なるほど。お前、何もしらねえみたいだな」

「聖杯戦争？」

「そうだ七人のマスターとサーヴァントで行う儀式だ」

○

「へえ、お前、死ぬつもりか？」

「なんでき、死ぬつもりなんてない。俺はただ、戦いを止めさせるだけだ」

「それを、死ぬつつうんだよ」

○

「ぐああああー!!」

「あーあ、マスターが死んじゃったか。やり直しするか。って、俺も死ななきゃいけないのか」

○

「なっ!!…俺は死んだんじゃ」

「俺の能力だ。俺はマスターが戦うなら止めはしねえぜ。何回だつて生き返らせてやるよ」

○

「ぐうああああ！！」

「またか」

○

「
っ!」

「
……っ」

「無理だろ。てか、あいつ、一人で夜出かけるとか死に行ってる
ようなもんだと、いつ気づくのやら」

○

「マスターいい加減、学習しようぜ。俺らには他のサーヴァントは殺せない。だから、マスターを殺せばいいさ。人間であるなら俺は簡単に殺せるぜ。そうだ、次からは俺もついてってやるよ。人間であるならマスターだって殺して見せるぜ」

「それは駄目だ。他の、マスターは殺さない」

「そうかよ」

「…だったら…何度でもやり直してヤルヨ」

1st Day 午前

2月1日

「よお、お目覚めかマスター」

「お前は…アヴェンジャー…」

頭が混乱する。……あれ、てか俺、こんな召喚したっけ？

…目の前には俺の殻を被ったような形をした『この世全ての悪』ユクシノムクが俺に話しかける。そいつは俺に話しながらパズルをしていた。

あれ？でも俺、こいつのこと知ってる。…多分俺が召喚したのだから。

「なんだよ、スゲエ具合悪そうだけ。変なもんでも喰ったか？」

「はあ？、そんなもの食べるわけないだろ」

しかし、あのうねうね、凄く気になるなあ。てっ、今はそれとこころではなく。

「前回、俺どこで殺されたんだっけ？」

前回、誰に殺されたか覚えていない。たまにあることだ。

「あ？、前はライダーのあの鎖で殺されたんじゃないか。しかし、あれはいてかったなあ」

そっだ、前はライダーに殺されたんだ。あの鎖で。

「それよりいいのか、桜って子に先に飯、作られるぜ？」

「今、何時だ？」

「さあな」

時計を見る。少し早めに起きたようだ。俺は布団をかたづけ、居間にむかう。

「…って、お前、そのうねうね取れよ。藤ねえと桜が見たら驚くぞ」

「はいはい、とればいいんだろ。あと宝具だつつつの」

桜はまで来ていないようだ。台所に立ち料理をすることにした。

○

「よし、出来上がり」

ガラアア

どだだだだダダダダ!!!

ん、この音は。

「おっはよおー!おねえちゃんお腹すいたぞおー!」

虎の登場である。

「藤ねえ、…もう少し落ち着いて入ってこられないのかあ？」

「むう、だっておねえちゃんお腹すいたんだもん」

「ハア、はいはい。食事はもうできてるから座ってくれ」

毎日、騒々しい虎である。

「あら、アンリ君は？」

藤ねえが唐突にそんなことを聞いてきた。

「アンリ？…あれ？、さっきまではいたんだけど。どこいったんだあいつ」

「先輩、アンリ君ならさきほど道場のほうに行きましたよ」

え、道場？

「そっか、じゃあ、俺ちょっとアンリのこと呼んでくる。桜と藤ねえは先に食べててくれ」

アンリを呼びに道場にむかう。

「おおい、アンリ。朝食が出来たぞ」

「……………ブツブツ」

アヴェンジャーはなにやら落ち込んでいるみたいだが。一体どうしたのだろうか。

「おい、アヴェンジャー」

「おう、マスターどうした」

「こっちにやっと気づいたようだ。」

「飯ができたぞ。てか、お前こそこんなところで何してるんだよ？」

「ああ、それか。なんでだと思っ？マスター」

アヴェンジャーなりに何か理由があるのだろうか。しかし、道場と

いづことは……そうか

「修業したくなつたとか？」

「んなわけあるかあっ！！大体いまさらサーヴァント中、最弱な俺が修業したって意味ねエヨ！俺が言ってるのは、お前ら、朝からいちやいちやしすぎでってことだっ！」

いちやいちやって

「誰がだ？」

「お前だよ！桜つて子とお前だよ！。朝からあんな、いちやいちやされたんじゃ、いづれんだよっ！こっちの身にもなってみろっ！」

……。

「なんでさ。桜は別にそういんじゃないぞ。そうだ、妹みたいなものだ」

「んなわけねえだろ！。あれは恋する女だぜ。それもお前に。このリア充やろっ！。そしてリア充死ね。どうせいつもあの娘のおっぱいばかりみてんだろ！」

「お、お前は、何、言ってるんだよ。それよか早く飯、喰いにいくぞ」

確かに最近、桜は色々なところが成長している気がする。

「……ああ、わあっただよ」

道場を出て居間にむかう。

「まあ、遅いよう。士郎にアソビ君」

「あれ？先に食べていっていったのに」

てっきり食べているとおもったんだが。

「いえ、作ったのは先輩ですから先に食べるといふことはできません」

「そうか、じゃあ全員そろったし食つか」

いつものように、四人そろって飯を食う。ちなみに、アンリは俺の生き別れの双子の弟という設定で通している。

○

飯を食い終えたら後は学校に登校だ。

1st Day 午後

午前の授業も終わり昼休みになっていた。飯を食うために昼休みは生徒会室に行く。飯が食い終わった後、友人であり生徒会長である柳洞一成に頼まれてストーブを直していた。一成には、一度生徒会室を出ていってもらった。

「ふむ、いつもすまん。直りそうか？」

「ああ…大丈夫だ。ケーブルがいかれてただけみたいだな」

小道具を取り出し、修理を始める。

「いやあ！そうか！さすが頼りになるな！衛宮は」

「大げさだよ一成」

「おっと、昼休みが終わってしまったな」

「じゃあ戻るか」

○

午後の授業が終わり下校時間になる。帰りに商店街に寄り、食材を買って帰る。

「ただいまあ」

家には多分、アヴェンジャーがいるはずだ。

「おう、マスター。思っただがマスターは弱いよな」

帰ったら突然、自分のサーヴァントに駄目だしされた。

「お、お前だって人のこと言えないだろ」

こいつだって一度も他のサーヴァントに勝ったことがないのだ。

「俺はサーヴァント中、最弱なサーヴァントだからいいんだよ」

アヴェンジャーは毎回何かにつけて、最弱というが。

「それ、言ってる虚しくならないか？」

「なるに決まってるだろ」

あ、へこんだ。

1st Day 夜

「今日も見回りに行くのかマスター？」

アヴェンジャーは不服そうに言う。

「行くにきまつてるだろ。誰かが巻き込まれたら大変だろう」

「そう、ま、別にいんだけどさあ。俺らがその巻き込まれた人を助ける実力なんてないだろ。お前だってわかってんだろ？」

「……………くっ！」

確かにそうだ、俺らには実力なんてない。でも、

「誰かが苦しんでいるのを放っておいたままっていうのは嫌なんだよ」

「そうか。さすが、正義の味方様（異常者）だな。」

「それじゃあ、俺、行って来る」

今日は公園に行ってみよう。それで、何もなかったら後は帰ってこよう。

「ちっ……おい、マスター」

「ん、なんだアヴェンジャー？」

アヴェンジャーは気がのならそつに俺を呼び止めた。

「今回は俺も行く」

「は？お前…まさか他のマスターを殺すつもりじゃないよな？」

ずつと前に『俺が戦いに出るならマスターを殺したほうが早い』なんていつてたような気がする。

「マスターがそれを望まねえならやんねえよ」

「本当だな？」

「ああ、本当だ」

なんか急に、そんなことを言われると不気味だな。

「そうか、じゃあ、殺さないってんなら、いいぞ」

「よし、それじゃあ行くか。ああ後、確かに俺は『人間であるマスターを殺したほうが早いつて』と言ったかもしねえが、実はあれ嘘だったりする」

「は、はあ？」

こいつ、今更そんなことを。

「いくらマスターといえども…サーヴァントに守られていたんじゃないだ。俺の出る幕なし」

「お前、それ早く言ってくれよ」

もう、少し早く言って欲しかった。

「俺は気まぐれだしな」

○

家を出て、夜の冬木市に出る。

公園の近くを見て回る。

「なあ…マスター？」

「ん、なんだ？」

アヴェンジャーが、やっぱり駄目だ、みたいな顔で俺を呼ぶ。

「今回の聖杯戦争は全て鍛錬にまわしてみたらどうだ？お前、魔術師なんだろ？」

「鍛錬？鍛錬なら普段からしてるぞ俺？」

「もつとだよ。マスターが弱かったら何度、聖杯戦争を繰り返して
もいみねえだろう？」

鍛錬か。確かに俺に実力なんてない誰かを助ける実力が無い。そう
いった意味では鍛錬をしたほうがいいのだろうか。いや、そもそも
今まですつと魔術の鍛錬をして来たが魔術の腕が伸びたことなんて
あまりないんだぞ。本来ならどこかの魔術師の弟子になるのがいい
のだろうけど、俺には魔術師の知り合いなんていないし。聖杯戦争
中である今現在、他のマスターの魔術師の弟子になるなんてことは
できるわけないし。

……しかし、やっぱりそれでも鍛えたほうが良いかもしれない。

「そうだな。わかった今回は全て鍛錬に回す。このままでは、ずつ
とやられっ放しだし」

「おお、それがいい。お前、たいてい六日間で死んでるし、たまに
は聖杯の期限が過ぎて、また繰り返すのもいいんじゃないか？」

そうだな。そういえば、たいてい六日間で死んでいたな。聖杯の期

限は二週間ある。つまり14日を全て鍛錬に回すことになるのか。いや、もしかしたらそれ以上あるかもしれない。

「そつだな。じゃあ、そろそろ帰るか」

見回りも終わったので家に帰ることにした。

2nd Day

2月2日

目覚めた場所は土蔵だった。ただ目の前には桜の顔があった。

そつだあの後、土蔵に入って魔術の鍛錬を始めたんだ。それで確か鍛錬の途中で寝てしまったわけか。

「ああ、桜。おはよう」

「はい。おはようございます、先輩」

「ああ、すまん桜もしかして……」

「はい、朝食の準備はできていますよ」

やっぱりか。最近、桜に先を越されるな。唯一の趣味みただったものが…。消えていく。……………と、今の自分の格好を確認する。鍛錬と言っても、ついでにストーブとかも直していたので服が汚れていた。

「ああ…この格好で藤ねえの前にでたら、藤ねえのやつ怒るよなあ」

「はい、そうですね。その格好では藤村先生は怒ってしまいますね」

桜は軽く微笑む。

「……………」

思わず、その微笑みに照れてしまう。桜は最近、いろんな所が成長してる。胸とか。

服を着替え、居間にむかう。既に藤ねえと桜とアヴェンジャーは席についてた。そして、俺が席についたところで朝食が始まる。

○

朝食を食へ終え。

「先輩、もしかしたら明日から来られなくなる日があるかもかもしれません」

そういえばそうだった。桜は明日から来られなくなる日があるんだ

った。何度かの繰り返しで、これは絶対に決まっていることだと判明した。まあ、要するに桜にとって絶対にはずせない重要な用があるということだ。

「ああ、わかった」

「あ、それじゃあ私は朝連に遅れるので、先にいかせてもらいますね」

「気をつけてな」

「はいっ」

○

そろそろ、俺も学校に行こうかな。

「おう、マスター死ぬなよ」

「お前は朝から物騒なこというなよ」

アヴェンジャーが登場。ちなみにアヴェンジャーは昼間は家にいる。

「…あと、四日、五日後くらいか？」

「……ああ。そうだな」

いきなり話は変わったが。四日、五日後というのは、慎二が結界を

発動させる可能性が高い日なのである。それで結構、毎回、俺はライダーに挑んで死んでいたりする。

「今回はわかってるよな？」

アヴェンジャーが意味深に質問をしてくる。

「ああ、わかってるよ。無謀なことしない。だから、せめて万全な状態で、もう少し実力をつけてから挑もうと思う」

俺はそう言っただけで家を出た。学校に行き。昼は生徒会室で飯を食い。放課後は、少しでも、魔術の鍛錬をしたいので早めに帰ることにした。

家に帰るとアヴェンジャーはパズルをしていた。そういや、いつも思うが、まだそのパズル、クリアできないんだ。そのパズル簡単なんだけど。

夜は鍛錬をした後寝た。

3rd Day 17th Day

2月3日～2月17日

俺は今回の聖杯戦争に顔を出さずに、全て修業に念を入れる。

朝は、毎朝早く起き土蔵で鍛錬をする。放課後になればすぐに家に帰って鍛錬をする。

色々なもので試してみた。鉄パイプや木刀などを強化してみた。たまに、息抜きに投影したけど。

Side in アヴェンジャー

まさか、あんな言葉でアイツが修業することになるとはな。まあ、俺がアンナ言葉を言ったのは、四日目、五日目、六日目、以降の世界が見たかっただけなんだが。うまく、いったみたいだぜ。今回は八日目、九日目も超えられんじゃねえか？

○

予想通りだ。

俺たちは8日目に突入した。聖杯戦争の現状はどうなっているかシラネエケド。七人目が現れなくて協会あたりは慌ててるかもしれない。本来、聖杯戦争はいつまでも続けられるわけではねえし。時間制限がある。つまり、時間内に誰も勝者が現れなかったら聖杯は閉じてしまう。つまり期限切れというこったあ。

聖杯戦争で勝利するには、自分以外のサーヴァント全員を殺さなければならぬが、俺を殺したら聖杯戦争はやり直しになってしまう。俺の宝具はそういうものなのだ。

既にサーヴァントは全員そろっている。俺はいわば、七人目？、いや正確には六人目か。俺は最弱のサーヴァントであるせいかな召喚されたことに誰も気づいてねえ。夜中、町を歩いても他のサーヴァントにバレルなんてこたあねえかったし。

そつだ、俺は最弱なりの生き方をすればいい。

さて、観賞してよつか。聖杯戦争を。

.....°

8
t
h
D
a
y

7
t
h
D
a
y

○

S
i
d
e
o
u
t
ア
ヴ
エ
ン
ジ
ャ
ー

1
6
t
h

D
a
y

1
5
t
h

D
a
y

1
4
t
h

D
a
y

17th Day

結局、今回は無意味に終わってしまっ。

結局、今回の聖杯戦争は全て鍛錬にまわしたが、呆れるほど成長が
しなかった。切嗣おやじの言いつけ通りにやっているけど、本当にこの方
法であっているのだろうか。

○

聖杯は閉じようとしていた。

「で、結局、マスターは何の成果も得られなかったと」

「む、何かは得たぞ。多分…」

色々と物を修理をしたんだ。原因は残るのだから無駄ではなかった。

「けっ…無駄じゃねえか。ガラクタ直してただけじゃん」

「…い、いいだろ、別に」

「おっ、マスター、そろそろ聖杯閉じるぜ」

そうか。また…繰り返すのか。次は鍛錬だけというのは止めておう。

「じゃあ、マスター次で会おうぜ」

俺は自分の部屋に行き、布団に入りそのまま眠りにつく。

B A D
E N D

R e s t a r t

3rd Day 17th Day (後書き)

一週目、終わりだー

ただ、間違った鍛錬しても無意味に終わるといふ結末。

えんだな」

「お前それいつ買ったんだよ？」

テレビゲームって結構高いんだぞ。てか、金はどっから調達したんだよ。

「いつでもいいじゃねえか。金は藤ねえさんから貰ったんだよ。……ほら、マスターは気にせず早く飯作ってくれよ」

サーヴァント（奴隷）とは思えない発言をする。

「はいはい、今から作るよ。……あ、その前にいいか？」

「おう、なんだ？」

アヴェンジャーはゲームをしながら答える。

俺は前回、殆ど鍛錬をしていたせいか一人でいることが多かった。休憩時間でも土蔵にいた。それで、一人でずっといたせいか普段は考えないようなことを考えた。

例えば…。

「アヴェンジャーは聖杯に何を願うんだ？……」

今まで一緒にいたが、こいつは聖杯に何を願うか、聞いたことがない。

「はあ？アンタなにいつてんだ？俺にそんなもんあるわけねえだろ。……強いていうなら面白いことか。まあ、これは聖杯の力を借りなくてもできることだけだな」

「…面白いことって…？…お前は何が面白って思えるんだ？」

「ああ？、俺が楽しいと思っただよ。わかったか、アホマスター」

ぼろ糞、非難される。まあ、アヴェンジャーはいつもこんな感じか。そうだ……。他にもアヴェンジャーには言っておきたいことがあるのだった。

「俺、今回は他のマスターを探すことにするよ。もし他の」

と途中までだが、これからの事について話すと。アヴェンジャーはなんかプルプル震えだした。

「隣町？あの橋を超えた？」

「そつだ。お前はいったことがないだろう？」

「ああ、行ったことねえぜ。そつだな、隣町はまだ埋めてなかったな」

ガララララ

と、アヴェンジャーと会話している時、玄関が開く音がした。もしかして、桜か？うわ、もしかして、結構こいつと話してたのか。

「おつ、お前の女房が来たんじゃないかねえか……くっく」

アヴェンジャーが皮肉をこめて笑っている。

「おい、女房とか言うな。何度もいうが桜は」

「へいへい、わかっていますよ、どうせ妹みたいなものとか言うんだろ」

まさに、そのとおりだ。てか、もう何回も言ったことか。

○

いつも通り、食事が終わって。学校に登校する。

学校では特になにも大事な事はなかった。

○

夜

「行くぜ、マスター」

夜になるとアヴェンジャーは乗り気で俺に声をかけた。

「あ、ああ、ちょっと待ってくれ。先に門に行っていてくれ」

「おお」

アヴェンジャーは俺の支持通り門にむかった。

俺は、土蔵に行つて武器となるものを探した。

鉄パイプしか武器となるものがない。

「
トレース
同調、
オン
開始」

鉄パイプに強化の魔術をかける。鉄パイプは上手く強化されたみたいだ。よし、今日は調子が良いみたいだ。

自分の魔術を確認した後、アヴェンジャーが待っているだろう門にむかった。

「マスターおつせえぞ。」

「てか、なんでお前さっきから楽しそうなんだよ」

アヴェンジャーはさっきから旅行に行く気分で待ちわびている。

「俺は、初めてのことが好きなんだよ。それで今回は初めてのことをだしい。てか…新しい出来事がやれなかったのは、そもそもお前が同じところで何回も死んで、中々次に進めなかっただけじゃねえか。学習しろよな」

「うっ…」

その通りである。今まで結構、同じ所で死んでいた記憶がある。繰り返した記憶の中ではうる覚えの所もあるけど。大抵はライダーかバーサーカー？に殺されている気がする。………いや、待て。俺はバーサーカーに殺されたことあったっけ。…でも、なんだこの記憶は。いや…今は深く考えるな。

……よし。

「そろそろ行くっか。アヴェンジャー」

「おお」

聖杯戦争が始まってから夜の冬木市は違和感を感じる。魔力に満ち溢れたような。

冬木大橋を超え隣町に移動する。

「おし、マスターどこ行くんだ？」

大橋を超えたところで、アヴェンジャーがそんな事を聞いてきた。

「んん、新都を歩いてみるか」

この日は新都の周りを見て回った。結局この日、他のマスターは見つからなかった。

2nd Day 4th Day

2月2日

まず整理したいことがある。

俺は今まで何のサーヴァントと出会ったことがあるかだ。

まずは、ライダー。マスターは間桐慎二だ。サーヴァントは鎖みた
いな武器で攻撃してくる。2月7日か2月8日に結界を発動させる
可能性が高い。要注意だ。

次に、バーサーカーだ。出会ったはずなのに覚えていない。マスタ
ーにも出会ったことあるような気がするが。出会っていないような
気もする。…記憶に混乱が見られる。なぜ、記憶が混乱しているか
はわからない。

結果、この二人しか知らない。

後は、セイバー、アーチャー、ランサー、キャスター、アサシンのクラスだが。

多分この中で、呼び出されないクラスがあるだろう。

俺がアヴェンジャーというイレギュラークラスを呼び出したから。

○

桜と藤ねえが来て飯を食う。

いつもの光景が過ぎる。

「先輩、明日からは来られなくなる日があるかもしれません」

「ああ、わかった」

そういえば、桜の外せない用事とはなんなんだろうか………
……っ………一瞬嫌な想像をしてしまった。…
…桜は聖杯戦争と何か関わりがあるのだろうか。と考えてしまった。
桜には出来れば聖杯戦争になんて関わって欲しくない。…しかし、
間桐の後継者である慎二の妹だ。妹とかは魔術とかを知らされない
らしいけど、………桜は一体、あの日は何をしているのだろうか。
………駄目だ。考えるな………慎二がマスターであって桜はマス
ターではない。余計なことは考えるな。

学校に登校する。

朝から生徒会室でストーブの修理をし………？

「いや、しかし衛宮は本当に役にたったぞ。…今のところは、もう
直して貰いたい物はないぞ」

いや、そつだ。全て直したんだっけ。

この日、学校では特に大事はなかった。

○

夜になった、今日はどうする？

「アヴェンジャー…」

「行くのか？」

声をかけるとアヴェンジャーは話の内容を察した。

今日は深山町の港に行った。特に何もなかったので帰った。

2月3日

今日は桜が来ない日である。いや、正確には朝は来るが、夜は来ない。毎回この日の夜は来ない。なぜだろう。

朝、四人で食事をする。

学校に登校する。

あ、いつもの癖で生徒会室にきてしまった。もう直すものなんてないのじ。

「折角来たのだ、茶ぐらいはだすぞ?」

朝から生徒会室でお茶を飲んだ。

今日も授業を受け、終わったら帰る。

今日、この日、何かとても重要なことがあるような気がした。気のせいだろうか。

そういえば俺、放課後はこんなに早く帰ってたっけ。…そうか、いつもなら、生徒会室でストーブを修理していたんだっけ。…それで修理を終えた後は………帰ったんだっけ？………思い出せ。何か重要なことがある気がする。確かその後、…慎二と呼ばれたんだ。………なのためにだ？………いや、そもそも俺は慎二が境界を作らせた張本人と知った時から、なるべく刺激しないように避けていたんだぞ。

駄目だ。思い出せない。

夜になった。

今日は鍛錬をすることにした。

「なんだ、マスター今日はいかねえのか？」

「行きたいけど。さすがに鍛錬も疎かにはできないし。あと疲れが溜まってるってのもあるから。今日はマスター探しは止めとくよ」

「なあ、マスター？仮にマスターを見つけたとしたら、どうするんだ？」

「えっ？それは、この聖杯戦争のことについてもっと詳しく知る必要があるだろ。だから……」

「おいおい、マスター。慎二みたいなマスターだったらどうすんだよ。」

う、確かにそれは話し合いの余地がなさそうだ。やっぱり闇雲に探し回っても駄目か。でも、例え死んだとしても、誰がマスターで何のサーヴァントを使役しているかでも、わかれば今後何らかの手を打てるかもしれない。

「確かになあ。どこかに、詳しくこの聖杯戦争を教えてくれるマスターはいないかな？」

「いたら、そいつイカレテルナ」

「なんでさ、親切な人じゃないか」

確かに敵同士だから、そんな奴がいたら色々と凄いと思う。そんな奴に出会える確立は一体どのくらいだろうか。

○

鍛錬を止め、そろそろ寝ることにした。

2月4日

特に何もなし

5th Day 6th Day

2月5日

「ふむ、君は確か衛宮か？ここで何をしている？」

俺は昼休み陸上部のある人物に頼まれて陸上部の器具置き場で器具の修理をしていたところ氷室女史に声をかけられた。

「ああ、お前んとこの蒔寺に頼まれて直していたんだ」

「ふむ。そうか、それはすまないな。あいつ、衛宮に無理矢理押し付けたのだから？」

確かにそうだ。休み時間、蒔寺に『じゃあ、衛宮頼んだぜ!』と言って無理矢理でどっか行ってしまった。

「嫌なら断ってくれてもいいだろうに」

「いや、俺こついう、器具いじんの好きだから嫌ではないぞ」

俺の唯一の趣味といたら、料理がガラクタイじりくらいである。それに誰かのために役にたつのは嬉しいしな。

「…そうか、ではお言葉に甘えるところ。……と言っても、あまり迷惑をかけるわけにはいかないしな。後で、蒔寺にはキツク言うておく、今後は無理に押し付けたりはしないようにする」

「いや、俺は全然こついうのは大丈夫だぞ。氷室女史もなんか直し

て欲しい物があつたら、バンバン言ってくれ」

氷室は少し、納得のいかない顔をしたが

「わかった。衛宮がそうしたいなら、そうしておこう。ただ無理なときは無理といってくれ。特に蒔寺には」

「はははっ、わかった。無理な時はそうするよ」

そういえば氷室は何をしに来たのだろうか？

「そういえば、どうしたんだ？今から部活ってわけではないだろう？」

昼休みは原則、部活動は行われていないはずだ。

「…ふむ、実は昨日、器具を出している最中、落とし物をしたかもしれないのだ。それで、探しに来たのだが」

氷室はどうやら、ここに落とし物をしたみたいだ。

「だったら、俺も探すの手伝うか？」

「いや、かまわない。それほど大切な物ではないのでな。それに衛宮はそれを修理しているだろう」

そうだけど……やっぱり困っているのなら手伝ったほうが良いのではないだろうか。

「いや、でも昼休みにここにくるってことは、それなりに大事なもののんじゃないのか？」

「ふむ、確かにそうも見えるか。……しかし、私が落としたものは赤のボールペンだ。それほど大事なものではない。また買えばいい話だからな。……昨日、記録をつけるときにポケットに入れていたのだが、どこかで落としてみたんだ」

赤のボールペンか。確かにそこまで大事ってほどの物ではないな。ただ、あれは授業で結構つかう。

……さらに、誰かに借りようとも、大抵他の人は赤ペンを一本しか持っていないかつたりする。

「失くしたんなら、俺のを

」

放課後

買い物をしに商店街にきた。

「なんで、これでは駄目なの？」

「あのお客様、これは外国の通貨であるので」

ん、一人の少女がなにかもめているぞ？

髪は白銀でドレスをきている。なんかどこかお人形みたいで可愛らしい。

「あの、どろしたんですか？」

困っている人を見かけたら助けてやるのが俺の使命だ。

「…………え…………」

「いやあ、この子、外国の通貨が日本で使えると思っているんだよ

なるほど。

「えっと、この子はどれを買いたいんですか？」

「ああ、このクリームの大判焼きだよ」

「それじゃあ、それください」

お金を渡して、大判焼きをうけとる。

「はい、毎度ありがとう」

「はい、ごきげんよう」

「え、あ、ありがとう」

俺はその少女に大判焼きを渡す。

……てか、この子はどこの子供だろう？……冬木市で外国の子供なんていたっけ？……それとも旅行か何かかだろう？

「それじゃあ、俺はこれで」

俺は、もう用事はないので帰ることにするよ。

「あ、待って！」

「ん、どうした？」

「おにいちゃん？」

見知らぬ少女におにいちゃんと言われた。

「え、おに

「うん、やっぱり、おにいちゃんだ！」

やっぱり、って俺はこの少女に会ったことない気がするんだが。

「やっと会えたあ！」

「ええっと、ごめん。どっかで会ったことあったけ？」

正直、この少女と出会った記憶がない。

「むうう。まあ、初めてだし仕方ないかあ。私、イリヤスフィール。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンよ」

この少女の少し納得がいかない、という顔が可愛かった。

ええっと。それで。

「イリヤスフィー……ル？」

「イリヤでいいよ。それよりおにいちゃんの名前を教えてください？」

俺は自分の名前を教える。この少女は人懐っこいのかすぐ打ち解けた。

「そうだ土郎、そこに公園あったの。ちょっとそこでお話しない？」

「ん、ああ、かまわないぞ」

○

「驚いたよおにいちゃん、なんで召喚してないの？」

「召喚？……………っ！」

一瞬、なんのことがわからなかったが、召喚という単語をよく考えてたら直ぐに何のことがわかった。

「おにいちゃんはマスターではないみたいだけど。∴ そのようすと、わかるみたいだね」

「まさかつ、イリヤは」

まさか、こんな少女が…

「そう、私はマスター」

こんな少女がマスターなんて。

しかし、イリヤは俺は召喚してないと思っているみたいだが、俺はイリヤに召喚したことを伝えるべきだろうか？イリヤから色々と聖杯戦争について教えて欲しいが……。

今はやめておきなさい。

○

それから、何気ない会話をした。

「じゃあね、おにいちゃん。バーサーカーが目を覚ましたみたい。また会ったときはよろしくね」

「ああ、じゃあな」

イリヤは笑って公園を出て行った。

バーサーカー？

2月6日

特になにもなかった。

5th Day 6th Day (後書き)

友達に文章表現が足りないといわれましたorz

7th Day

2月7日

授業中、結界が発動した。学校には生徒がいる。慎二のやつ発動させやがったか。

いつも、ここで死ぬが、……俺が前に出ても、意味がない。いつものように殺されるだけだ。……俺はこの日この時、何をどうすればいいんだ。……ただ、見ているだけでは……誰も救えない。……しかし、また繰り返し返されるなら……。

やむ終えない。やっぱり情報は必要だ。情報がないと俺にも太刀打ちできない。そもそも俺はこの結果がどんな効果をもたらすか全く知らない。ただ、もの凄く危険だ、ということはわかる。

「アヴェンジャー……」

「あいよ」

呼ぶとアヴェンジャーは現界した。

「……………アヴェンジャー、今回は霊体してライダーに見つからないように情報だけ集めてくれ」

やむ終えない。この方法しかないのだ。皆を救うには。……………
…そう、なんども自分に言い訳をした。

「くっ、なんだあつ、だんだん本当の正義の味方らしくなってきたなあ」

なっ！…何を言ってるんだ、こいつはっ！これが正義の味方だっ
！？

「こんなの正義の味方じゃないっ！」

「いや、てめえは、本当の正義の味方の在り方に近づいてきたぜ」

……っ。言っている意味がわからない。正義の味方は皆を守るありかたでなければならぬ。それで、なんだ？………今回は次の繰り返しのために、皆を切り捨てるんだぞ。

「へいへい。マスター熱くなるなよ。ボイン姉ライダーさんに見つかるぜ？」

「……っ」

そつだ。見つかったら。またやり直した。慎重に廊下に出よう。

慎重に歩き見つからないように歩いた。

そして慎二を見つけた。慎二は廊下にいた。危ないから近くの教室に身を潜めた。

いつもなら、ここで飛びだして行くが……。今回は黙って見ていることにした。

「これでっ！僕の勝ちだ！！ああ、この学校の生徒も僕のために犠牲にされるなんて光荣だとおもってんだろうなあああ！」

イカレテル。昔はあんなふうではなかったのに。昔はあんな性格ではなかった。嫌味は言う奴だったけど、それなりにお節介を焼く男だった。

慎二はあの調子で一分が立とうとしていた。

ダダダダダダダッ

なんだ、足音が聞こえる。

「慎二っ！！」

なっ！あれは…遠坂。なんで遠坂が。

「ちっ！、お前、思ったより早かったな」

まさか遠坂は…。

「ええ、そうよ。そもそも魔術回路もない、あなたがなぜサーバーヴァントを持っているのかしら？」

今、遠坂はなんと言った？…慎二には魔術回路がない。………待て、だったら、誰があの手ヴァントを召喚したって言うんだ。………駄目だ。考えるな。

「…っ！。そんなことどうでもいいだろう！………それより遠坂、結界を解いて欲しかったら、土下座して、僕に忠誠を誓えよ。そして、この結果もといてやる」

「嫌よ、言ったでしょ半端な奴は嫌だと」

「くっ！使えねえやつだな。いい、ライダー！遠坂を殺せっ！」

「アーチャー！」

「凜、離れろ」

急に赤い男が現れて、ライダーの攻撃をいつの間にか出した双剣で受け流す。あの男を見た瞬間、一瞬、何か遠い出来事を思い出しかけた。

「おい、マスター、ここは危険だ。離れるぞ」

アヴェンジャーがここを離れると俺に注意する。しかし、駄目だ。もう少し様子をみる。

「けっ、さすが正義の味方、自分の命はどうでもいいなんてな」

俺はその言葉をあえて無視した。

ライダーとアーチャーの戦いであるが、俺にはアーチャーの方が有利になっているように見えた。

「ライダー何やってるんだよ!!とつとと殺せよっ!!もういい、アーチャーじゃなくて遠坂を狙え!!」

「ほっ、そちらのマスターは随分余裕があるそうだな」

「……………」

アーチャーがライダーに話しかけるが、ライダーは何も喋らない。

「……く、何も話さんか」

アーチャーは皮肉をこめて笑う。

キイイインキイイインキイイインカキイイインカキイイインカキイ
イイイン
カキイイインキイイインキイイインカキイイインカキイイインカキ
イイイイン
キイイインキイイインキイイインカキイイインカキイイインカキイ
イイイン

鉄と鉄が重なり合わさる音がする。スピードは普通の人間の速度ではなかった。そして、改めて思う、自分は今までこんな人外なやつらに戦いを挑んでたのかと。俺が勝ち残れる可能性は0ではないだろうか。

「ふっ」

「……っ……」

アーチャーは、しまったっ、という顔をする。、アーチャーがバランスを少しくずしてしまったのだ。アーチャーは鎖を受け流しそこねた、その鎖はアーチャーには刺さらず、鎖は後ろにいる遠坂の右腕の肩らへんを目掛けて飛んでいった。

「凜っ！避ける！」

あのままでは、遠坂が危ないっ。

「おい、マスター！」

アヴェンジャーは何か言ったみたいだが、俺は知らない内に遠坂の前にとび出していた。

「……………っ！」

鎖は俺の腕に刺さっていた。この感覚だけは、なんどやってもなれないものだ。

「え、衛宮君！」

「大丈夫か…遠坂？」

「なっ、なんで衛宮が…っ！…！」

慎二とライダーは油断している隙にアーチャーはライダーに攻めかかった。

アーチャーはライダーを完全におしていた。

多分、俺の予想だと慎二は本当のマスターではないだろう。魔術回路がなければ召喚なんてできない。そして、ライダーは真のマスターと魔力が供給されていないせいで弱っているに違いない。

「うっ…マスター。今日は撤退したほうがいいかと」

「ちっ。しかないっ！。しかし、なんで衛宮がつ！まあいい、ライダーっ！」

「はい」

ライダーは自分の首にあの鎖を刺すと、魔方陣みたいなのができてき

て。

「自己封印・ブレーカー・ゴルゴーン暗黒神殿」

大きな爆発がおきた。

「なっ……!」

校舎は悲惨なことになっていた。教室や廊下は壊れている。しかし、
どうやら結界は解けているようだ。

「……遠坂!」

「え、な、何、衛宮君?」

「まだ、他の生徒、助かりそうだなぞ！」

俺は他の生徒の容体を見て、助かると確信した。

○

他の生徒が病院に運ばれひと段落がついた。

「衛宮君、聞きたいことがあるのだけど？」

帰ろうと思ったなら、遠坂に呼びとめられた。
……
この光景……どこか見たことがあるぞ。

そうだ、確か。繰り返しの途中で忘れていた記憶だ。では、なぜ？俺はこの出来事を忘れていたんだ？俺は以前にもライダーとアーチャーの戦いは見たことがあったはずだ。……でもなぜ？今頃になってこの記憶が蘇ったのだろう。

この後、俺は遠坂に何聞かれるんだっけ？

俺はこのあと、遠坂に。……確か……。

「おう、やっと記憶が戻ったか。お前、このままでは、遠坂^{アイツ}に俺らの記憶をまた、曖昧にさせられるぜ」

霊体化しているアヴェンジャーが俺に話しかけてきた。

そうだ！！俺は遠坂に記憶を！！このままでは不味い！！この記憶は残しておかなければならない。それに、他の記憶だって曖昧にされる可能性だってある！！

俺は全力で遠坂から逃げた。

気づいたら校舎にいた。

「小僧、なぜ逃げた？」

……っ！

さすが、サーヴァントか。すぐに追いつかれた。

遠坂も後からやってきた。

くっ！

まずい、そもそも俺は、記憶を受け継げば良いのだから。

死と記憶を曖昧にさせられるかのどちらかを選ばなくてはならない。

俺は

選択をしなければならぬ。

1 死ぬ

2 記憶操作

記憶操作

死ぬ

「ちよっ！！衛宮君！！」

俺は記憶を引き継ぐ。

窓から飛び降り、頭から落ちた。地面に落ち頭からは血がでていた。

D
E
A
D

E
N
D

R
e
s
t
a
r
t

選択肢2を選んだ場合1週目に戻る。

7th Day (後書き)

はい、2週目が終わりましたあ

1st Day

2月1日

前回の出来事だけではなく、他にも曖昧にされた記憶が帰ってきた。例えば、バーサーカーに殺された記憶とか。残念ながら…マスターの顔をよく覚えていない。

他にも様々な死因があったが、詳しくは覚えていなかった。断片的な記憶ばかりなのだ。さすがに記憶が戻ったといっても、何度もループしてるんでは忘れてしまう。

他に覚えている事と言ったら、ランサーに殺されたことだ。マスターは知らない。……しかし、ランサーに殺された場所はどこだか覚えていない。ランサーとは……何日の夜に……どこで……あったのか。

整理しよう。出会ったことがあるサーヴァントは、ライダー、バー

サーカー、アーチャー、ランサーの四人だ。

後は、セイバー、キャスター、アサシン、（この内の一人は存在しない）か。もし、存在したら第8のサーヴァントと言う事になるか。

「よお、マスターお目覚めか？」

毎回、死ぬと俺のそばで目を覚めるのを待っているサーヴァント。今では、目覚めるとテレビゲームしてるが。

「思ったんだが。俺、遠坂に何回、記憶操作されたんだ？」

「俺が知るカヨ。……………と言っても……………一回だけってのはねえな。多分…三、四回は以上は記憶操作されているはずだ。…この記憶量だとな」

そういう気がしていた。少なくとも一回以上は消されている。折角記憶が全て戻ったが、何回とループしたせいで、大分前に繰り返した記憶は薄れ始めているのだろう。

「しかし、あのネエちゃんに聖杯戦争のこと、もっと詳しくきけば良かったじゃねえか。聖杯戦争のことを話せば記憶操作される必要はねえだろ」

確かにそれも考えた。だが、それは駄目だ。

「俺らは多分、聖杯戦争で一番最弱だ」

「そうだな」

アヴェンジャーは何を今更、みたいな顔で答える。

「さっき、思い出したんだが。俺は一回、遠坂に聖杯戦争のことを聞いている。聖杯戦争のことについて聞いた記憶は綺麗さっぱり無くなっているけど。…で、話を戻すが、それが、別な前回の時のはずだ。多分俺はその時、自分の魔術のことについても喋ったんだと思う。アヴェンジャーはどう思う？強化しか使えない魔術師を？」

「そりゃ、魔術師には程遠いわ」

そう言われると地味にへこむな。

「だろ。それで遠坂は俺にはこの聖杯戦争を勝ち残れないと思って、恐らくお前を殺して、俺の記憶を操作したんだ。お前、遠坂に殺された記憶あるか？」

これで、もし殺されていたら、

「あああ、なんかアーチャーに殺された記憶ならあるぞ。あんまし覚えてねえけど」

また、記憶を無くしてループしていたかもしれない。

「なるほど。どっちにしろ、あの時あの場所では遠坂と関わるのは止めたほうがいいかもしれないな」

では次は、どうするべきか。

「しかし、お前、変わってきてねえか？」

「何がだ？」

「色々だ。お前、昔は、無防備に突っ込むやつだったからなあああ。このループで心の何かが成長シテンジャネエか？」

「……ただ、無防備でアタツテも誰も救えない。……俺、飯作ってくる」

四人そろって飯を食って、学校に登校する。

○

「よお、マスター、たまには気分転換も必要なんじゃねえか？」

学校から帰ってきたら、アヴェンジャーが唐突にそんなことを言うてきた。

「確かに」

俺はもう、ほとんど聖杯戦争前の生活をしていない気がする。バイトとか休みっぱなしだし。……………そうだ、バイト行こうかな。

「じゃあ、俺バイト行って来る」

○

それにしても、久しぶりにバイトをしたなあ。

俺は今、家に帰っている途中である。偶には良い気分転換になるかもしれない。

…歩いてみると。目の前には白銀の髪で、コートを着ている少女が歩いていた。

その少女が俺の横を通り過ぎようとしていた。

「早く呼び出さないと死んじゃうよ、おにいちゃん」

……っ！……確か……。思い出すんだ。……以前、公園であったことがあるはずだ。他にも、今回、思い出すことのできた記憶の中にもこの少女はいたはずだ。……俺はこの少女のことを知っているはずだ。……名前は……。確か……。

「イリヤっ」

思い出すことができた。

「え？、なんで…私の名前…知ってるの？」

そっだ、イリヤだ。

「ずるい、おにいちゃんだけ私の名前、知ってるなんてずるい。おにいちゃんも名前教えてよ」

「え、あ、俺は、衛宮士郎だ」

途中イリヤは俺のイントネーションを間違えたので、イリヤには士郎で良いと言っておいた。

○

色々なことを話したり聞いたりした。イリヤの城のこととかメイドのこととか。切嗣^{じいさん}のこととか。聖杯戦争のこととか。

「じゃあ、シロウはもう呼び出したんだ？」

「ああ、そうだ」

「じゃあ、おにいちゃん。先に他の人に殺されないようにね。私が最後にシロウを殺してあげるから。その間に、他のマスターに殺されたら嫌だよ。生憎ランサーのマスターは既に」

「えい」

イリヤの頭をこついた。

「 イッタアア。な、何するのよシロウ!?! 」

そりゃあ、だって。

「子供が殺すとか物騒なこと言っつては駄目だ」

「なっ！、私！シロウより大人だもん！」

「ああ、わかったわかった。じゃあ、これからは殺すとか物騒な事
いっては駄目だぞ？」

「う、うん。わかった。じゃあ、シロウは今度、人形にしてあげる
から」

それもそれで、なにか問題あるような気がする。

「てか、そういえばさっき、ランサーのマスターがどうのこうの言
ってたよな？」

「じゃあな、イリヤ。また会えるか？」

イリヤとはなんとなくまた会いたかったので、ついそんな言葉をいってしまった。

「え、シロウは私に会いたいの？」

「ああ、会いたい」

「そう。じゃあ暇があったらまた会おうね？私、時々、お城抜け出してくるから」

それは、仕えているメイドさんが大変そうだな。

「ああ、無茶はしないようにな」

「大丈夫、私これでも抜け出す才能はあるんだから」

○

家に帰ると桜が夕飯の支度を終えて待っていてくれたらしい。

「先輩、お疲れ様です」

「士郎、やっと帰ってきた。おねえちゃん、もう死ぬかと思った」

藤ねえは、もう限界のようだ。少し帰るのが遅かったか。

「おせえぞ。士郎」

アヴェンジャーにも待たせてしまったか。

「すまん、桜に藤」

「「ッるららららあああッ！…！…アンリ君…あなた、おにい
ちゃんの事、呼び捨てで呼んじゃ駄目でしょうが！」」

……急に叫んだと思ったたらそんなことか。そういえば、アンリは俺の生き別れの双子の弟という設定で住まわせているんだっけ。一期、どちらが兄役をやるか争ったこともあったな。

「……っ！」

アンリは俺のことを兄さんというのは嫌らしい。

「よお、兄貴」

「うむ、よろしい」

藤ねえが落ち着いたところで食事をする。

○

深夜になった。

今日イリヤが言った言葉が気になっていた。

ランサーのマスターは既に敗退してる。

という言葉である。

○

今日は土蔵で鍛錬をして寝た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1523ba/>

Fate/stay hollow

2012年1月6日01時51分発行